熊野の森から

怪しの熊野

其の四十四「南方熊楠」

和歌山大学
システム工学部
環境システム学科
中島敦司教授

熊楠は熊野の山中でガキ（ダル）に自身が出遭ったことを記している。突然、空腹感に襲われて行き倒れてしまう怪異だ。（イラスト／BoBo）

先日、南方熊楠と妖怪のことをテーマにしたイベントで熊野の妖怪についてお話しする機会を得た。本職は生態学であり民俗学では素人の筆者と、民俗学者とのトークセッションも行った。研究者の皆さんはお若い方ばかりで、熊楠の偉業は世代を超えても色あせていないことを強く感じた。若手の妖怪研究者として妖怪本を何冊も執筆され、国際日本文化研究センターの「怪異・妖怪伝承データベース」の作成にも関わった飯倉義之さんとも議論した。

研究者の皆さんは、熊楠の残した記録を鵜呑みにすることなく、その意味するところについて深く考察されていた。例えば、地域に残る妖怪話と熊楠の記録を比較し、熊楠の聞いた話、観たモノ、感じたモノはなんであったのか？　民俗学の手法を駆使して明らかにしようとされていた。話の類似性、音や字の類似性、その分布範囲、若い皆さんの興味は尽きない。時には、熊楠と同じ気持ちになれるか？　現地に赴いてご自身で確認されるような地道な調査をやっておいでだった。

破天荒なイメージのある熊楠だが、公の場面ではキチンとしていた。写真は御前進講の際の記念撮影（昭和4年）（国会図書館デジタルコレクションより転載）

その中で、お一人の研究者が興味深いことをおっしゃっていた。「熊楠の記録した妖怪には明確な姿が無い。これは、当時の熊野の人々が、山中などでみられる「姿あるもの」が何であるかを説明できる知識があったからだ」というものだ。これは、筆者が常に言っている「熊野の妖怪は種類が少ない。それだけ自然への知識が深く、その存在が不思議にならなかったからだ」という主張と一致する。また「熊野の妖怪は出没する場所が明確に決まっている。だから現場に行って確認することから分かることは多い」という。不思議つまり説明できない事象が観測されるのは、いつも同じ場所だ、という話だ。これも筆者の主張と一致する。民俗学の手法を取っても、生態学の手法を取っても結論が同じになることは、非常に興味深いことだ。

現在、熊楠を田辺市の名誉市民に推挙する運動が起こっている。素晴らしいことだ。私達、今を生きる者は、熊楠ですらやりきれなかった研究、社会活動を受け取り、さらに発展させる必要があろう。それは、自然保護と文化保護だ。地域の宝は、カネよりも大事なのである。

中島敦司（なかしま・あつし）教授プロフィール

昭和38年、岐阜県生まれ。三重大学大学院生物資源研究科博士後期課程を修了。平成8年から和歌山大学システム工学部講師、12年から助教授。19年から教授。専門は森林生態、自然再生、砂漠緑化、海岸林再生、地域資源、地球温暖化、自然エネルギー、民俗（妖怪、伝承）。NPO活動にも力を入れる。熊野方面には年間30～50日は訪問し、研究する。